

雑居への恐怖——近代日本の他者認識

イ・ヨンスク

こんにちは、イ・ヨンスクです。私が今まで専門にしてきたのは「言葉」に関しての問題ですけれども、今日は少しその視点を変えてみることにします。今日の話は主に、いま四方田先生がお話しなさいました、日本社会では他者をどういうふうに思っているのか、そして、他者と一緒に暮らすということなどをどのように理解してきているのか、ということを考えたいと思います。

他者といつても、他人ということではなくて、今日お話しするのは日本社会の外側にいる人々のことです。国際的にもそうですし、日本の中でも、最近、外国人や移民に対していろいろ問題が起きています。拉致問題にしてもそうですし外国人労働者の問題もそうですが、多分皆さんはそういう現象に対して、どのようなスタンスをとって理解すればいいのか、非常に迷っ

ていると思います。

これは私自身にも当てはまることですが、やはり私たちと違う他者に対して嫌悪感を持つ人もいるかもしれませんが、いろいろと思い悩みながらも、結局大きな流れの中で社会的な反発に加担してしまったり、あるいは憤慨をしてみたり、というふうに皆さんの心の中にもさまざまな動きがあると思います。

そういうふうな他者とのかわりということが、いまの日本社会の場合には、非常に心理的な問題として提起されてきます。日本人は心が細やかであるのに何々人は心が悪いとか、国外で日本人に反対するような人たちは一体どのような心のあり方を持つのかと憤ったり、そもそも民族としてももの感じ方が違うんじゃないかと解釈したり、つまり、そういうふうな社会的な現象を心理的な「心」の問題としてまとめていく。

いま本屋さんに行ってみると、心に関する本がたくさん出ていますね。というのは、現代のように非常に複雑な世の中に暮らしていると、社会の仕組みは見えにくくなっていますから、結局自分の中で平和な何かを追求してみたくなくて、心の問題に心が集中するわけです。小説もそうだし、それから映画などでも、どこか心が癒されたいような気持ちが生まれてきます。そういう気持ちは、私自身もわからないではありません。けれども、いま求められているような感動は、自分の心の中だけで充足してしまうところがあります。そうすると、心の平穏だけが求められて、自分の心のなかの偏見や誤解などの暗い部分に向き合うことがなくなりす。きたない社会はもうたくさんだから、きれいな心に向き合いたいというわけです。

そうすると、本当に他者とかかわり、もつと直接的に言いますと、括弧つきの「外国人」というものに対する恐怖心というのを、そういう心理的な次元だけでとらえていいのかどうかを考えなくてはいけないと思います。それともう一つは、そういう他者への恐れは日本独特なものであるのだろうか、ということを考える必要もあります。

まず最初に、これは日本だけの問題であるかどうか、それについてちょっと話をしますと、おそらくこの教室には、いわゆる日本の国籍を持っている方もいれば、日本の国籍を持っていないけれども、子供のころから日本社会に親しくなじんで育った方がいらっしやると思います。

しかし、日本の社会では、日本に来て一年もたっていないかったり、あるいは、私なんかはかなりの年月がたっていますけれども、常に日本のアウトサイダーだと思っている人からすると、今のテレビでの拉致事件の報道のやりかたや、外国人に対する非常に排他的な言説を見ると、これはやはり日本独特の問題だと感じてしまうような反応もあり得ますね。

しかし私が思うには、ほかの国の状況と比べてみますと、他者に対する恐怖感、他者を排斥する言説というのは、どの社会でも多かれ少なかれあるということがわかります。もちろん、そのあり方というのはいろいろ違ってきます。社会や時代によつて違ってきますけれども、他者への恐怖感が多かれ少なかれどの社会にもあります。それは社会の自己防衛本能かもしれない。

そうしますと、どの社会でもあるということになると、これは人間の普遍的な心理的な状態かという、簡単にそう断定してしまうこともできません。それは決してそうではなくて、外国人恐怖という現象は、ある特定の歴史的状況のなかで現われて、だんだんとふくらんでいくようなところがあります。社会的なレベルで外国人恐怖が生まれるのは、けつして個人的な心理に根ざしているのではなくて、ある大きな時代の変り目の中で、大きくそれが育つきっかけとなるような歴史的な背景があるわけです。

今日、皆さんにお話ししたいのはそのような観点から、明治

時代に実施した条約改正をめぐって起きたさまざまな問題のことです。また、その前後の時期の話为例にしながら、日本の他者意識や外国人恐怖が歴史的にどのように形成されて、今日どういうふうにならそれが続いてきているのかということをお話ししたいと思います。

他者を排斥するような意識というのは、どの社会にもあるにはちがひありませんが、けつして人間共通の心理的な次元に還元することはできません。これは特定の歴史的な背景の中で形成されているものであることを押さえておくべきだと思います。なぜ、私がこういう話をするかというと、これは人間が原罪みたいに普遍的に持つて生まれたもので、どんなに努力しても変わることができないという、非常に我々は絶望しますね。

しかし、歴史的なプロセスの中で出てきたものだということがわかれば、そういうあり方をどのように考え直さなければならぬかという方向が見えてくる。

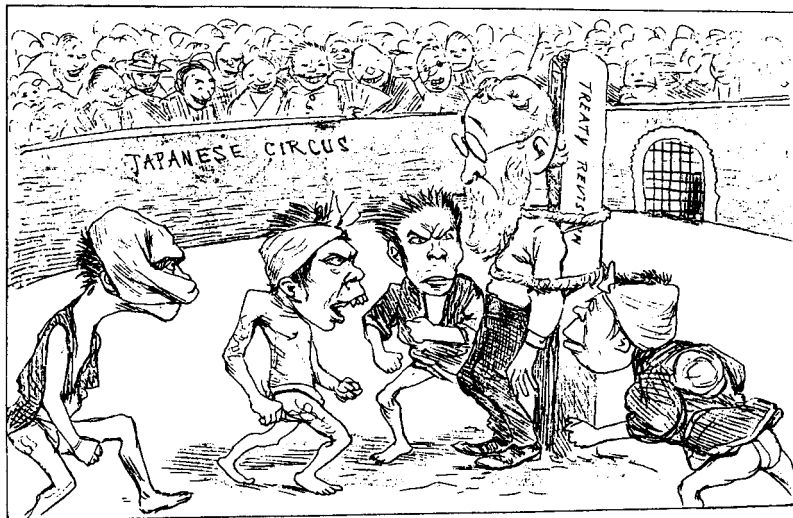
それからもう一つは、歴史的に形成されてきているものということは、場合によっては我々の努力によつて、それを變えていったり崩していったりすることもできるだろうというふうな希望が、少しは見えてくるということを前提にして話をしたいと思います。今日、皆さんにお配りしましたレジユメに沿つて話をするつもりですけれども、時々寄り道をするかもしれませぬ。

まず日本で、他者認識を變えるような大きなきっかけになつ

た歴史的な事件として、一八九四年の第一次条約改正をめぐる問題をとりあげたいと思います。条約改正はもちろん法律的なレベルの話ですけれども、それがなぜ他者認識の問題に結びつくかという例として、レジユメのなかの絵を見てください。これはフランスの風刺画家のビゴアの絵です。多分この中でご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ビゴアは一八八二年（明治十五年）に来て、一八九九年（明治三十二年）まで日本に滞在します。ビゴアは、最初はこんなに長く日本にいるつもりではなかつたらしくて、浮世絵の技術を習うために日本に来て、一年か、二年ぐらいいようと思つたらしいんですけれども、日本の風俗とか、日本の人情に非常に魅力を感じまして、結局、足かけ十八年も日本にいました。

ビゴアは、明治の日本の非常に貴重ないろんな風景を描いた版画をたくさん残しています。ビゴアは農民とか、職人とか、漁師とか、商人という普通の生活をしている人々、それから娼婦とか芸者などの日陰の人々などを描いています。そういう人々に対してビゴアは愛情をもつて優しい目で見合っています。痛烈な風刺の標的になるのは、明治の多くの政治家たちや上流階級の人々です。そうはいつても、庶民を風刺した作品もないわけではありません。

今日、皆さんにお配りしましたレジユメの右側のほうに載せられた風刺画は、彼が帰国直前に発表した作品集『日本人の生活』のなかにある「条約改正」という作品です。この絵を見ま



At the mercy of the anti-foreign spirit..... allows some violence!!!!!!

排外感情のなすがままに……さあ、楽しもうぜ!!……(壁：日本サーカス、柱：条約改正)
〔『日本人の生活』(第2次・第4号)明治31年)清水勲編『続ビゴ—日本素描集』岩波文庫、1992年、141頁より。

すと、真ん中に丸眼鏡をかけた西洋人らしい割と年をとっている人が、杭に縛りつけられています。その周りには四人の男の人たちが非常に恐ろしい顔つきで取り巻いていて、西洋人らしい人に襲いかかろうとしています。この四人の男の人たちは、恐らくみんな下層の人たちのように見えます。彼らの着ているものを見ればわかります。はだしだし、下半身も褌しかつけていないですね。着ているものも洋服じゃなくて、着物か、半纏のたぐい입니다。西洋人の真つ正面にいる男の人は、ほとんど裸に近い。上半身には何も着ていない。

そしてこの四人の男の人は皆、非常に恐ろしい顔をしています。それで西洋人に殴りかかろうとしていますけれども、ちよつと後ろの日本サーカス(JAPANESE CIRCUS)というところを見ますと、ここは彼ら四人の男の険しい表情とは違う、対照的な表情の人たちがいますね。たくさんの観客たちが見物をしていますけれども、彼らはかなり上流階級の人たちのように見えます。

軍服を着ているような人もいれば、上品な帽子をかぶっている人もいて、この観客は結局、自らは手を汚さずに、その恨みを四人の下層の人たちによって晴らそうという気持ちでそこにあって、四人の男の人たちはこんなに怒って恐ろしい顔をしているにもかかわらず、彼らのほとんどが、ニタニタと笑っているという風刺画ですね。

そうしますと、ビゴが帰国直前に一体どうしてこういう絵

を書いているのか、というのを考えたいと思いますけれども、たぶん日本史で有名な話なので、私が説明するところではないんですが、明治政府にとっては、やはり領事裁判権、つまり外国人の治外法権の撤廃と関税自主権の回復というのが、非常に重要な外交問題だったわけです。そのために欧米との不平等条約を何とかして改正しなかったのですが、日清戦争と歩調と合わせるようにして、一八九四年の第一次改正条約によって、法権は全面的に、税権は一部だけが改正されました。それで、この改正条約は一八九九年の七月から実施されることになったわけです。

そうすると、ここまでの話を皆さんが聞いた感じとしては、条約改正というのが法律の問題と裁判権の問題だったら、なぜ他者問題がここで出ているのかと不思議に思われるかもしれない。条約改正になって、これほどビゴーがこういうふうな絵で風刺するぐらい話題になったのはなぜかというところ、条約改正になって裁判権とか、税権に関して日本の立場が回復されたのはいいんですが、それまで外国人はある決まった一定のところに住むことになっていました。ところが、条約改正になってからは、外国人の特殊な居留地というのがなくなっていくわけです。そして外国人と一緒に住むことを受け入れざるをえない状況が生まれます。これがいわゆる「内地雑居」問題です。

そうすると、裁判権や関税の権利が戻ってくるのはいいんだけれども、日本人じゃない外国人が、日本の中にどんどん入っ

てくる。こんなに恐ろしいことはないわけです。その恐れはたちまち外国人排斥の心情を生み出します。ビゴーの絵の背景には、このような事情があります。そこでは、上流階級と庶民がともに外国人排斥に乗り出していく姿が描かれているわけです。それだけではありません。内地雑居をきっかけにして、外国人が入ってきたら、彼らは自分たち日本人をどう見ているかということが急に気になり始める。こういうわけで、いわゆる日本人論というのが、そのときから盛んに出てくるわけです。

今でも本屋さんに行くと、日本人論に関する本がたくさん出ていますね。私が最初に日本に来たのは二十年以上前ですけれども、幾つかびっくりしたことがあるんですが、その中の一つが、本屋さんに行くと日本人論というのがたくさん出版されていることでした。

もちろん、韓国でも韓国論のような本は何冊もありましたけれども、他者の視線をもとにした韓国論なんていうのはそんなになかったんです。むしろ韓国の中の軍事独裁政権をどうするかとか、そういうことに関心が集まっていました。ところが、日本に来ると、日本人はこういう性格であるとか、日本はこういう社会であるということを論じた日本論や日本人論がたくさんあったので、私はずっと印象に残ったし、びっくりした記憶があります。もちろん、こういう日本人論は日本語で書かれていますから、日本の読者を前提にしているわけです。そうになると、日本人論のいちばん熱心な読者は、日本のことを知ら

ない外国人ではなくて、日本に住んでいる日本人自身だということになります。そんな本は、いったいどういふ必要があつて書かれるのでしょうか。

日本人論という議論がいつごろから多くなつたのかを調べてみますと、条約改正が実現して、内地雑居が実際に実施されるようになったときに、非常にたくさん出てきたことがわかります。そして、その当時のいろいろな知識人と言われる人たちが、たくさん日本人論を書くようになります。

その議論の中で、日本人はどういうところがいいところであるか、どういふところが悪いかということが論じられるんですが、いま皆さんに言うのと、びつくりするような表現が、その当時には出ています。どういう人が日本人論を書いているかというのと、早稲田大学を創設した大隈重信とか、片山潜とか、外山正一、洪沢栄一、伊藤博文などなのです。東大総長をやつて文部大臣にも就任した外山は、非常に細かい日本人論を書いています。

彼らの日本人論をちよつと紹介してみましよう。そのときに世間の多くの方が内地雑居に関心を持っていることをどういふ感じで述べているかというのと、床屋に行つても、銭湯に行つても、みんな内地雑居に対する話をする、犬も猫も全部話をするというふうには、当時の文献に書いてあります。もちろん、犬や猫が話をするわけではありませんが、それほど内地雑居が世の中で大きな話題になつていたということです。

すこし具体的な発言を紹介してみます。例えば前に朝鮮の外交官であつた大島圭介という人が、こういうことを言っています。内地雑居になつて多くの外国人が日本を訪ねてきたら、国民が非常に貧しいし、住宅が汚いし、道路が悪いし、商店が非常に不潔で、規律がなくて、旅館も非常に汚いのを見てびつくりするだろうと。一般の市民の人たちは、何をやらせても遅いと。それからおもしろいのは、今もちよつと似ているところがありますけれども、宴会でばか騒ぎをする。これは恥ずかしくて、何とかしなければいけないと言っています。それから日本人はおかしくもないのに何でにやにやにや笑うんだと。これは今でもちよつとあるかもしれませぬ。

それから、日本人はとても行儀が悪いのがけしからんと言っています。これは、ちよつと皆さん納得がいかないでしょう。今では、日本人は非常に行儀正しいのに、アジアから来た人たちは行儀が悪いということが言われますけれども、その当時は内地雑居ということ前提にして、日本の大知識人たちはこういうふうな心配をしているわけです。行儀が悪いし、それから約束の時間を守らない。これも今の人は納得がいかないかもしれませんね。こういうふうな言説というのは、アジア人に対していま言っていることと非常によく似ているわけです。

それから、衣服が非常に野蛮であると。よくとりあげられたのは、褌ふんどしです。日本人の褌というのは、熱帯地方から移住してきた野蛮な人種の洋服のように見えると非常に心配をしていま

す。それから、さつき話しました外山正一も同じように、衣服とか履物が下品でよくないとか、汽車の中で大きな荷物を背負つてきて非常に困ると。それから室内でつばを吐くような、よくない癖をもっている。それから道の中で立ち食いをする。これをどうするんだということも出ています。それから東京の道路は全く整備されていなくて、人通りの多い道路にごみ捨て場が設置されているのは、非常に衛生上害があるので不愉快であると言っています。

それから、これもまたおもしろいことなんですけども、宴会のスピーチでは政治の話など、かた苦しい話しかできない。これは日本社会の欠点であるという指摘をしています。それに、むやみに強いお酒ばかり飲んで酔っ払っている。それから自分の身分に合わないぜいたくをする。葬式に行つて、ちゃんと礼儀正しくしないと書いてあります。それから部屋のあけっ放しをしている。これが欠点なのかどうかわかりませんが、とにかくそういうことが書かれています。もう一つおもしろいのは、食事の時間に他人の家に行つて、上がり込んで帰らない。非常にこれは問題であつて、とても恥づかしいということも言われています。

いろいろ見てきましたが、だいたいこういう言い方は、何とか日本社会を啓蒙しなければいけないという思いがあつて出てくるのだと思います。こういうふうに出てくる知識人たちは、多くの場合ヨーロッパに留学して知識を身につけた人々で、そ

のときに流行していた社会進化論の崇拜者たちです。人間というのは進化しなければいけないけれども、その進化のもととはヨーロッパにあつて、それに比べて日本は劣っているという考え方が前提にあると思います。

そしてこのように、今お話ししました日本人論の中味というのは、いま話を聞くと、ちよつと納得いかないと感じる人もいるかもしれませんが。食事の時間に人のうちに上がり込んで、帰らないという人は、少なくとも皆さんの世代とか、都会ではめつたにいない。日本人の欠点とされているものは、結局のところ、ヨーロッパの市民社会のモラルに反しているものばかりです。むしろ古くからある村落共同体での行動様式のようなところがあります。今では保守的な立場に立つ人たちが、共同体を大事にしましょうというふうに言うことがあります。当時の知識人はそれとは正反対の方向を向いているわけで、その意味でおもしろい言説です。

たとえば、つばを吐くというのは、ヨーロッパ人や欧米人が、アジア人を描くときの一つのステレオタイプとして、非難やべつ視の対象になるというのは今でもあります。そうはいつても、「日本人はよく道でつばを吐くのでけしからん」というのが、ほんとうに事実であるのかどうかということだけを考えるのと、大事な点を見のがすことになります。

もちろん、日本人の中にも、道でつばを吐く人もいれば、そうでない人もいます。しかし、「日本人はよくつばを吐

く」というふうに言うときには、一つの「日本人」という括弧つきの枠の中に一定のイメージをつくりあげることになりました。それは、日本人の中で自発的に出てきたイメージではなくて、西洋人の視線を内面化して、それでつくり上げたイメージであると思います。「日本人はよくつばを吐くのでけしからん」と言っている知識人は、自分が西洋人になったつもりで日本社会を批判しているんですが、その根底には、西洋人の目から日本がどう見えるかが気になって気になってしょうがない、という心配があるわけです。

こういうふうな内地雑居の資料を、私は笑いながら読んでみましたが、それでも、それでどういことを思い出したかというと、一九六〇年代から七〇代にかけて、韓国が西洋や日本など、いわゆる先進国を意識したとき、韓国政府の社会啓蒙運動の一つはこれだったんです。非常によく似ているんです。たとえば、韓国では「コリアンタイム」と言いますが、韓国人は時間にルーズだということがよく言われて、韓国人が約束を守らないと世界から笑われるので、しっかりと時間の約束を守るようにと、政府がすごく啓蒙をやった時期がありました。

それから、先にあげた例で、日本人は非常に苦しくて、あまり笑わないし、話をすれば政治的な話しかできず、やたらにばか騒ぎをするという言い方がありました。同じようなことが韓国でも言われていました。それでいま思い出したのは、一九七〇年代の半ばごろ、韓国社会ではスマイル運動というのが

ありました。韓国人はあまり笑わないというので、道でスマイルをするように、プラカードができたことがあります。学校でもスマイル運動ということで、教室に「ほほ笑みは人間のお互いの理解を高める」という掲示をかけたたり、バッジもスマイル、丸い顔が目が笑っているバッジがよくありますね、あれを付けたりしました。

おもしろかったのは、有名なアイスクリームを売るところでも、アイスクリーム屋は新しい製品が出ると、それに合わせて名前をつけますね。そのときに、本当にスマイルアイスクリームというのが出ていましたし、あちこちでスマイル、スマイルだったんです。というのは、やはりアジア人、特に韓国人の場合はお面のような顔をして、あまり表情がないというふうなことがよく言われていたんです。これもやはり西洋の鏡に映った韓国人の顔だったのだと思います。

そういうふうな他者の視線を自分が受け継いで、それを内面化して自分の姿をそれに合わせて仕立てていく。こういう視線のありかたは、昨年亡くなられたエドワード・サイードの『オリエンタリズム』という著書の中で出てきますが、本当にそのとおりだと私は思いました。だから、こういうふうな言説というのは、日本の内地雑居の時代とか、韓国社会の中でも同じように一九七〇代にありました。中国のことは詳しく調べていませんが、やはり中華民国の時代に西洋化が強く目指された段階で出てきたと思います。西洋から見て「アジア的」と見える

面をなくしていこうという言説が生まれてきたと思います。

繰り返しになりますけれども、こういう議論は実際にそうだったことを述べているんだと反論する人が結構いるんですけども、事実の問題だけでは片付けられません。実際にそういう人がいるかもしれませんが、そうじゃなくて、そういうふうな言い方、難しい言葉を使いますとデイスクールが、なぜ作られてきて、そのデイスクールがどのように社会を支配していくのかということが問題であるということを言いたいんです。たとえば、道でつばを吐く人を見たときですね。それを見て、具体的な誰々さんがつばを吐いたととらえずに、「日本人は道でつばを吐く」という言い方がどうして生まれるのか、ということとです。具体的な誰々さんから、抽象的な「日本人」へと、こういうふうになれば飛躍できるのでしょうか。

こういう言い方は、けつして内発的にでき上がったものではなくて、他者の視線を受けて、その視線を内面化していくことで生まれてきたものです。しかし、この視線の受けとめ方は二重の方向があります。西洋の場合ですと、自分とは違う他者、しかも自分より劣っている他者を認識することによって、自分たちの「西洋的な」アイデンティティーをつくっていくというプロセスがありました。これと似たことは、日本でもありました。西洋が日本を見る視線を、今度は日本がアイヌや沖繩に対して向けていくわけです。アイヌや沖繩を引き合いに出すことで、日本は自分の優越性を確認してアイデンティティーを作つ

ていったという面があります。

たとえば、当時、アイヌ民族のことをどのように語っているかを見てみると、アイヌは石器時代で歴史が止まっているという記述がよく出てきます。これは新聞記事のような一般向けの読み物だけではなくて、専門家の論文でもそうです。そして、日本人論で使われていたような言説を、そのままアイヌに対して向けて、野蛮性や後進性のレッテルを貼り付けていきます。そのとき日本は近代国民国家を立ち上げたばかりで、日本や日本人というイメージはあまりはつきりしていなかったので、アイヌという他者を認識することによって、「われわれ日本人」というイメージを作り上げていきます。アイヌは石器時代で歴史が止まっているが「われわれ」は違うと言うことで、「われわれ日本人」の進歩性を確認していきます。プラスとマイナスの方向を変えれば、こういうことになります。

これは沖繩についてもそうだし、植民地もそうなんです。日本が台湾や朝鮮を植民地にしたときにさかんに言われたのは、台湾や朝鮮は歴史に取り残されているという言説でした。だから、こう言えると思います。実は日本の自画像は、自然にできたのではなくて、西洋人や異民族や植民地などの他者と向き合うことで作り上げられていったと。

我々はまだ近代国家の延長線上で生きていますから、近代国家をつくった主体について、あまりにも当然のこのように思い込んでしまいがちです。多くの近代国家がそうですけれども、

日本の場合は、ネーションとしての自己がちゃんとできた後で異民族や植民地を支配していったというよりは、他者を排除することによって自己を形成していったという面があります。むしろ日本にとつての自己は、異民族支配や植民地支配と平行して作り出されたと言ってもいいかもしれません。だから植民地主義と日本の近代ナショナリズムということは、非常に深い関係にあると思います。

多分皆さんの中では、新聞を見てもそんなに楽しい話はなく、とくにアジア諸国との関係についてとなると、とても気がめいる話がいっぱいあるように感じる人もいるかもしれませんが、もうちょっと気持ちが和やかになるような話ができればいいなというのが私の願いですけれども、植民地の話をするとか、あるいは日本のナショナリズムの話をする、もつと気持ちが沈んでしまうことがあるかもしれませんが、そういうふうなことをちゃんと認識して、それをはつきりと対象化することによって、初めて我々は、もしかしたら国家や歴史から距離を持ちながら、自由になれるんじゃないかなと思います。

気がめいる話から逃げて癒しを求めたとしても、一時的な癒しというのは、必ず反動が来るような気がします。やたらに感情移入したり、一方的に反発したりするのではなくて、もつと距離を置いて物事を見る必要があると思います。現在わたしたちが生きている世界はどのような歴史を経て形成されてきたのか、それはいったいどういう仕組みになっているのか、とい

うふうに冷静に見ることによって物事を対象化していくと、非常に自由になるような気がします。

私が今日皆さんにお話しするのは、それほど心温まるような話ではないかもしれませんが、他者認識がどういふふうに形成されてきたか、それから日本のコロニアリズム（植民地主義）になぜ関心を持たなければいけないか、ということを少しわかつてくだされば、それが結局は、皆さんそれぞれのもつと力強い生き方への道を見つづけるきっかけになるだろうと思います。ちょっと大げさな話ですけれども、そうなればいいなと思って、あえてこういう話題を出しました。

話を戻しますと、欧米人の眼を通したイメージを持って来て、逆にそこから「日本」を立ち上げてくる。それで日本人の悪いこと、短所をいっぱい出してくるんですが、その日本人の中では、それじゃ日本人の悪口ばかり言っているかという、そうでもないんです。日本人の欠点をあげつらう一方で、西洋人に対してものごく警戒心を抱くわけですね。とくに、西洋人がいかに商売上手でずる賢いかということですね。欧米人は人情に乏しくて計算高いのに対して、日本人はビジネスの才能はないけれども、人情や細やかな気持ちにあふれていて、おおらかな心を持っている。だから、西洋人には気をつけなさい、というわけです。

その当時の知識人の話をまとめますと、西洋人は非常に冷酷な人間であるとしきりに強調します。西洋人は自分の利益のた

めであれば、決して人のことを考えない。労働者をどんどん搾取するだろうと。ここでもう一つ大事なものは、キリスト教に対する警戒心があったことです。西洋人はキリスト教を持っています。日本の風俗や文化を全部破壊するだろうと言っています。

先ほど、皆さんにお見せしました絵の、お年寄りのひげの長い丸眼鏡をかけている人は、確認はしていませんが、もしかしたら宣教師か神父さんかもしれません。このキリスト教に対する恐怖心というのは、たいへん大きなものでした。恐怖心を抱くと、それに対して極度に過敏な防衛的姿勢をとるようになり、ひいてはそれが暴力につながっていきます。このビゴアの絵は、そのあたりのことをとてもうまく描いているように見えます。

話はちよつと飛びますけれども、実はこのことは言語の問題にもつながってきます。日本語が「国語」として制定されて、植民地にも強制されていったときにも、一種の外の世界に対する恐怖心があったように思います。この点は、今日は話をするつもりはなかったんですが……。

日本語はよく「国語」という言い方をされますね。いわゆる皆さんがいま使っているその「国語」は、はじめからまとまった姿をしていたわけではありません。日本語が「国語」として整備されたのは、明治時代に入ってからのことです。明治になって近代国家を立ち上げていくときに、国家を背負っていくような国語(ナショナル・ランゲージ)をつくらなければいけないという意識が生まれました。ところが、その当時の日本語の

状況を見ますと、言葉は階層ごとに全部ばらばら、地域的にばらばらで、実際に青森と薩摩の人が会ったら、まったく話が通じ合わない状態でした。

それに話し言葉と書き言葉が大きくかけ離れていました。そうになると、学校ではどういう言葉で授業をするか、どういう言葉で裁判をおこなうか、それから、軍隊でどういう言葉で命令していくかということ考えたときには、まったく困ってしまつたわけです。明治の中ごろまで、日本の「国語」というものは、どういふものであるべきかということが、さんざん議論されました。それは、まだ「国語」がしっかりした足場をつくっていなかったからです。

ここで重要な役割を演じた人物が、後に東京帝国大学の国語学の主任教授となる上田万年という言語学者でした。その当時の知識人はみんなヨーロッパに留学をしますが、上田も三年間ヨーロッパに留学をして、日清戦争が起きる直前に戻ってきました。彼はドイツやフランス、いろんなところを見てきて、それと対照して見ると、本当に日本は近代国民国家を背負っていないような言葉がないから、何とかしなければいけないと熱っぽく訴えかけます。それが、ちょうど日清戦争から条約改正に至るこの時期なんです。

上田の有名な講演に、「国語と国家」というのがあります。ちなみに、国語というのは、いまでは皆さんにとって非常に当たり前の言葉ですけども、その当時はあまり国語という言葉

は使われませんでした。もちろん、単語そのものは、むかしからなかったわけではありませんが、ナショナル・ランゲージという意味での「国語」という言い方は、明治になってから使われはじめたものです。

たとえば、民俗学者の柳田国男は、地方の方言に愛着をもっていた人でしたから、明治になってみんながやたらに訳のわからない漢語を使い始めるようになったことを嘆いていました。柳田ははつきりと国語というのは明治になってできた新しい用語だと書いています。柳田の文章の中に、最近では若い人も女の人も「国語」などという漢語を口にする世の中になったと嘆いている文章があるほどです。

つまり、国民をひとつにまとめていくような国語というものが、まだ当時ははつきりとしていませんでした。そんなときに内地雑居になって外国人が入ってきたら、日本の言葉はいったいどうなるんだと、上田万年は心配するんです。

「国語と国家」という講演で上田が言っていることを、思い切ってわかりやすくまとめますと、まず上田は「あなたたちには、みんなお母さんがいるでしょう」と呼びかけます。そして、「しかし、そのお母さんの中では、それほど美人じゃないお母さんもいるけれども、美人じゃないからといって、お母さんを否定しますか。お母さんはどんなにきれいじゃなくても、自分の母として愛情を持つべきです」と言うんです。国語とは国民にとって母のようなものだから、言葉もおなじことなんだ

と言っているんです。

フランス語でしたら、世界一合理的な言語だと自画自賛することもできましたし、いまの英語でしたら、世界のどこでも通用する言語だと礼賛することもできるでしょう。でも、当時の日本語には、そんなほめことばは見当たりませんでした。むしろ日本語は、この日本列島の外では使われない貧しいことばだと言う人もいたくらいです。上田万年もおなじで、日本の言語状況をたいへん困ったものと見ていました。上田の弟子のひとりに保科孝一という人がいますが、この人は、文部省のなかで戦前の国語政策をリードする立場にありました。ところがこの保科は、日本語は種が悪い言語だとはつきり言っていました。これを常に磨いていかなければいけないと。そして、その磨きの道具（ツール）としてヨーロッパの近代言語学を持つてくるわけです。

そういうふうな構図になっていくんですが、そこでどういうことがわかるかというと、日清戦争の後で日本は台湾を植民地にし、日露戦争の数年後に朝鮮を植民地にするわけですが、植民地の異民族を同化しようとした際にも、優越感と同時に一種の恐怖感があったと思います。自分の国のなかに、自分たちにはわからないことばを話す人間がいることへの恐怖感です。こうした恐怖感と防衛本能が働きますと、言語のレベルで徹底した同化政策を進めるわけです。日本が植民地で民族語抹殺政策を進めたとよく言われますけれども、そこにはやはり幾つかの

原因があると思いますが、それほどまでに暴力的な言語政策に走らせた遠い背景の一つには、日本語が近代国民国家を背負うには不十分な貧弱なものであるという意識があつたかもしれない。

このような歴史のプロセスを見ていきますと、他者に対する過敏な防衛が、結局は暴力に結びついていくと言えると思います。だから今の日本の状況を見ましても、外の世界に対して、過敏なほどの防衛的姿勢がよく見うけられて心配になります。そんな心配が出てくるのは、ここで述べたような歴史的な背景があるからです。

話を戻しますと、西洋人という他者の視線に対する恥ずかしさが一方にあり、他方には、西洋人の冷酷さやキリスト教に対する警戒心がありました。実はこれはコインの裏表で、恥ずかしさがますます警戒心を強めさせて、暴力的な排外主義へと向かうわけです。

ここで考えなければいけないのは、日本がその視線を内面化した「外国」は西洋のことであつて、アジアのことは度外視されてきたということです。しかし、アジアのことが話題にならなかつたわけではありません。むしろ、アジアに対する語り方、ディスクールというものが、この時期に形成されました。欧米という外国に対して恥ずかしさを感じるのと裏腹になつて、アジアに対しては別種の感情が生まれてきます。

具体的に問題になるのは朝鮮と中国ですが、西洋が日本を見

る視線で、日本はこれらの国々を眺めました。これは非常に興味深い事実です。朝鮮や中国に対する視線やディスクールというのは、日本の中でずっと昔からあつたものかというところではなくて、ヨーロッパの目を日本に内面化した視線を、中国や朝鮮にそのまま浴びせたわけです。

今日は、内地雑居のときに大きくとりあげられた、中国人労働者の問題について見てみたいと思います。当時の日本社会は、中国人労働者をどのように眺めたかということですね。たとえば、人見太郎というジャーナリストは、内地雑居になつても中国人だけは内地雑居を許すべきではないといっています。そこには中国人に対する差別観が歴然と現れています。そのときの言い方で注目すべきなのは、差別がきわめて生理的な感覚の次元で語られていることです。

まず、中国人は蟻の群のように膨張力を持っていて、しかも低賃金で働くことをいやがらない、彼らが襲つてきて、日本の労働者が全部職を奪われたらどうするんだ、というようなことが語られました。こういう言い方は、外国人労働者の問題で、今でもどこかで皆さんは耳にするかもしれません。私は「朝まで生テレビ」を一度も見ることがないですけれども、もしかしたら、そういうところで出てくるかもしれません。保守的な人たちの中では、外国から安い労働力が入ってきたら、日本人の労働者の職が奪われる、だから外国人労働者は増やすべきではないというような意見もあると思います。内地雑居のときの

議論も、今のこういう議論とどこかで通じ合うようなことがあります。

もちろん、こういうディスクリールは日本特有のものではありません。アメリカ合衆国でも、中国人移民が増えたときに、似たような言い方で中国人を排斥しようとしたことがあります。

アメリカが奴隷解放した後、労働力を商品化していくということになったときに、中国人、特に広東省の方からたくさん中国人が入ってきているんですけれども、やはりアメリカの労働市場が中国人に奪われるという恐れが生まれました。そこで、中国人だけにはアメリカの市民権をあたえない。彼らは帰化する能力を持っていない人々であるという烙印を押します。

アメリカのことは専門でないので、これ以上具体的に詳しく述べることはできませんが、なぜそういうことになるかという問題を考えてみると、結局その場合も、アメリカがアメリカのナショナルなアイデンティティーを形成するためには、やはり他者を排除していく必要が出てきます。その中で、アメリカには、一方で黒人に対する人種差別があるわけですが、アメリカの白人性を守るためには、アジアからのいわゆる黄色人種との線引きをしなければなりません。その際に、やはり大挙して押し寄せる中国人労働者のことがよく話題にとりあげられ、他者を排除するようなディスクリールが形成されていくことになりました。

だから、こうした語り方は決して日本独特のものではないん

ですけれど、だからといって、人間の普遍的な心理に還元すべきでもなくて、国民国家が自己のアイデンティティーを形成しようとするときに、他者を排除するための仕組みとして共通するものがあると認識すればいいと思います。

日本の内地雑居に話をもどしますと、外国人を日本の中にあまり入れるべきではないと言われるとき、おなじ外国人といっても、西洋人と中国人では、そこで使われた言い方がまったく違うわけです。中国人を形容するときに、蟻であるとか、寄生虫であるとか、細菌であるとか、とても生理的な次元の比喩がもちだされます。こうして、ケガレの恐れと身体的な接触の恐怖感によって差別が生み出されます。これも私がまた思い出すのは、私が日本に来て間もないころだったと思いますけれども、東京都のある区営プールだったと思いますが、いわゆるフイリピンから来ている女性たちがプールに入ろうとしたときに、日本の主婦の人たちが、あの人たちは不潔で汚いからプールに入らないでほしいと抗議をして、大きく問題にされたことがあります。

こういうふうなケガレとか、衛生観念とか、病気になるのは、差別の問題と非常に深くかかわっています。最近ようやく裁判で見直されたハンセン氏病患者に対する差別などを見ても、そういうことがわかります。ご存知のように、裁判で差別が禁じられても、宿泊を拒否したホテルがあったほどです。政治的なレベルでの差別は問題にしやすいんですが、こういうふうな非

常に生理的な、衛生観念を持ち込んだ差別というのは、社会の中に根深く残っているような気がします。だから、その背後の構造をよく見ておかないといけないと思います。

外国人だけじゃなくて、小学校のいじめで子供たちが自殺したりするような悲惨な事件が起こったときでも、その子供に対して「黴菌」とか、そういうあだ名が付けられたようなことがありました。こういう差別感、一体どこから来ているのかをよく考えなければいけないと思います。普段はそれが隠れているようなときでも、ある危機的な状況になると、一挙にそれがあちこちで表面に浮上してかもしれません。前に申し上げたように、ケガレに対する恐れと身体的な接触の恐怖感というのは、けっして普遍的なものではなくて、歴史のなかのある一定の時期に作られ、それが社会の深い次元で生き残っていると思います。はつきりとした論理や概念で言い表しにくいものであるだけに、そういう差別観はとても伝染しやすい性質をもっています。

もう少し話を広げれば、身体的なものや身体観についても考える必要があります。今の日本では、身体のあり方に注目が集まっていて、身体論の本がたくさん出てきますけれども、これは本当に重要な問題だけに、慎重にあつかわなければならぬと思います。ある特定の身体のあり方が国民性と結びつけられたりすることもあります。身体の問題も概念化しにくいのですが、どういう身体の状態を理想的なものともみなすかは、やはり

歴史的に作られてきた部分が大きいのと思います。そういう歴史に対する緻密な観察力と分析力がないままに身体論を簡単に語ると、危険な方向が生まれるかもしれません。事実、日本の一九三〇年代のファシズム時代には、身体がさかんに論じられました。

中国人についてのデイスカールの話にもどしますと、こういうデイスカールは、直接中国人と出会って形成されたものではありません。実際に中国人との接触がなくても、何らかのステレオタイプに寄りかかって、いろいろと差別的な発言が生まれてきます。もちろん、明治時代以前にも他者に対する恐れはあったと思いますが、近代国家での差別は、自分を「国民」と一体化して、他者である別の「国民」全体を差別するような仕組みがあるように思います。

夏目漱石は、朝鮮を旅行して、その後新聞に旅行記を書きますが、そこで朝鮮人をどのように語っているかを見てみると、面白いことがわかります。いまの観光旅行にもそういうことがあると思いますが、実際に現地に行ったとしても、自分に見えるものしか見ないわけです。現実のことを語っているように見えても、そこで語られているのは、実はあらかじめもっていた偏見やステレオタイプにすぎないわけです。その当時出ていた新聞や雑誌には、朝鮮や中国の旅行記がたくさん出ていますけれども、ほとんどの旅行記は、現実の朝鮮や中国の姿よりは、日本人がすでにもっていた固定観念を描いているように思いま

す。たとえば、中国人や朝鮮人は怠け者であるとよく書かれています。しかし、よく考えてみてください。現地の事情もよく知らない人間が突然やって来て、主人のような顔をして命令したら、誰だって怠けたくなるでしょう。自分がいかに場違いな人間であるという自覚がないから、一方的に現地の人々に「怠け者」の烙印を押ししてしまうんです。

それだけではなくて、先ほど述べたように、西洋人の視線を借りて見たら、日本人も「怠け者」に分類されてしまうわけです。これはどういうことかという点、勤勉イコール近代社会、怠惰イコール遅れた社会という対立軸があらかじめあって、肯定したいときにはよい方の価値を、否定したいときには悪い方の価値をあてはめればいいんです。これは現実はどうだったかということではなくて、先ほどから繰り返し述べているディスコース、現実の語り方のレベルの問題です。

このような仕組みにしたがえば、自分の見ている対象に思いのままの価値判断を貼り付けることができるようになります。たとえば、いろいろな旅行記を見ると、中国人や朝鮮人を非難するだけではなくて、とても「気の毒」な人たちだという記述にも出会います。これは一見すると、同情して言っているように見えますね。夏目漱石の旅行記にもそういう場面が出てきます。しかし、これもやはり彼らが遅れた社会にいるという認識の一つの表われであるわけです。つまり、自分が上に立って他者を見下ろして言っている言葉であるわけです。

このように中国人に対していろいろと否定的な言葉を貼り付けていくわけですが、そのなかで最も恐れられているのは、中国人の膨張力なんです。大挙してやってきた中国人が日本人の職を奪うとか、社会に悪い習慣を広めるとか、日本社会にいるいると悪い影響を及ぼすことが頻りに語られています。ところが、これほど中国人の膨張力を恐れているがら、その一方で、日本人の膨張力には手放して賛美するわけです。

先ほどとりあげた人見一太郎は、こう言っています。日本の「繁殖力」は非常に強大なので、今は人口が四千万以下だけれども、今から五十年すれば六千万人になる。そうすると、北海道だけでなく南洋群島、朝鮮、シヤム、さらには南アメリカ、北アメリカなどで、日本人の大行進が見られるだろう。さらにそれから百年後になりますと、八千二百万人、今の二倍になると、世界各地に「膨張」して世界の至るところに日本人があふれるだろう。おなじようなことは、当時の代表的な知識人だった徳富蘇峰も『大日本膨張論』のなかで言っています。つまり、中国人が日本に膨張するのはけしからんけれども、日本人が海外に膨張するのはとてもめでたいことだというわけです。わたしにはずいぶん身勝手な話のように聞こえますが、どうでしょう。

まとめてみますと、日本ではこの内地雑居問題を通して、西洋という他者の視線を強く意識するようになり、その視線をもって日本社会を改良していこうとする。しかし同時に、その

おなじ視線をまたアジア人に向けて、二種類の外国人像を生み出すきっかけになった。その結果、中国人の膨張力に対しては恐れを持ちながら、日本人の膨張力に対しては非常に賛美をする。こういうふうには、非常に一方通行的な視線がここにある。このような視線は、今日まで根深いところで続いてきているんじゃないかと思えます。

言葉の問題については、今日はあまり話をしませんでしたけれども、実は、内地雑居がきっかけとなって、日本の標準語というのが急いで形成されたという面もあります。先ほど、西洋人が入ってくると日本の宗教や文化をつぶしてしまうという議論があったことを紹介しましたが、そのなかには言葉もあるわけです。西洋人が日本社会に入ってきて、日本語が崩されるようにするために、その岩として早く標準語をつくらなければいけないという議論が、内地雑居を前後に出でてきます。

先ほど、「国語」というのは既にあるそのままの言語ではなくて、「国語」は話すべき言葉として作られた言葉だと申し上げましたけれども、原理的には「標準語」も同じなんです。明治後半になると、東京の中流社会の言葉が標準語であると、文部省が規定するようになって、教科書が統一されていきます。たとえば、「おとうさん」「おかあさん」という呼びかけの言葉はそのとき教科書に導入されました。このような人為的な言語政策がなぜ必要とされたかという点、英語やフランス語というような強国の言語にのみ込まれないためには、それに対抗でき

るような標準語をつくらなければいけないということが、その当時の日本の近代国民国家をリードしていく知識人たちの考え方であったからです。先ほど述べた上田万年はそのひとりです。時間が少し過ぎましたけれども、内地雑居という政治的・社会的問題に直面することによって日本の他者認識が形成されてきたことに注目すべきだと思います。他者認識というのは、決して心理的なものに還元すべではありません。ところが、そうした歴史的なコンテクストが忘れられて切り離されると、それがもつぱら心理的な感情や個人的な感覚として感じられてしまうようになります。そうすると、それを批判的な対象として冷静に眺めにくいような状況になっていくのではないかと思えます。自分はたしかにこう感じるのだから、それでなぜいけないのだという開き直りみたいものが生まれます。

だから、物事を自由に眺めて考えるためには、そういう心理的な殻を破って、やはり歴史的なものをふりかえることが大事なんじゃないかと思って、今日こういう話をしました。どうもありがとうございます。(拍手)

四方田 どうもありがとうございます。今日は、十九世紀後半の内地雑居と日本のナショナリズム、他者についての排除という、百年以上前のお話をしていたきながら、実は、これは現在の我々を取り囲んでいる社会的状況に対する一つの指摘であるようにも私には思えます。イ・ヨンスクさんの話を聞いて

ていますと、我々を取り囲んでいるいろいろなエピソードがあるわけです。

例えば、石原慎太郎のあの三国人発言であるとか、齋藤孝の『声を出して読みたい日本語』のベストセラー化とか、あるいはアイヌをめぐるタイ人への偏見、あるいは今年、*2010*に対する台湾人医者への執拗な追及とか、そういったばらばらにいろいろ日本で起こっているようなことが、今日のお話を聞いてみると、実は一つの大きな流れの中で起こっているということが、非常に有機的に説明されているような感じがいたしました。

そして、それは決して現在の出来事ばかりではなくて、明治時代にも日本人は今と同じようなことをやっていたんだということがわかりました。それからイ先生がおっしゃる、これが歴史的な現象であるということを理解することによって、我々は歴史から解放されて、自由に自分たちのことを認識できるかもしれないではないかという、そういう希望についてもお話をしていたいただきました。非常に多岐にわたって、いろんなことを教えていただいた感じがします。

大嶺 いま大学院で、沖縄の映画についての勉強をしている者です。かなり単純なことですけれども、先ほどアイヌと沖縄をおとしめることで、日本という想像の共同体をつくり上げたとおっしゃられていました。それはやはりいろんなところでお話しにも聞きますし、本でも出てきますけれども、そのことを具体的に書いた知識人は、明治のころでは、特にだれだったのか

というのが聞きたいんですけれども……。

イ アイヌに関しては、人類学者がいろいろと調査していますね。ちょっといま正確に言えないんですけども、坪井正五郎や鳥居龍造だったと思います。学問的には評価すべきところもあるんでしょうが、やはり彼らはアイヌを「遅れた民族」「滅びゆく民族」としてしかとらえていません。沖縄に関しては少し問題が複雑で、二種類の言説があるんです。沖縄は日本が植民地化したときに、たくさん失業者が出て、内地にたくさん移民に出ていくわけです。そうした場合に、アイヌに関しては、異民族として非常に違うんだということをひたすら強調するんですが、沖縄に対しては、日本人には属さないとして排除していく人もいれば、沖縄は我々日本人と同じで、古い日本の姿がとどめられていると考える人もいます。二つの言説があるんです。ですがその根は一つだと思えます。沖縄に関しては、富山一郎さんの本などをご覧になれば、資料がたくさん載っていると思います。

ついでに朝鮮に関して申し上げますと、韓国併合の後に、日本語と朝鮮語の起源は同じであるという本がすぐに出ます。いわゆる日鮮同祖論です。これが同化政策に利用されるわけです。その説を唱えたのは、金沢庄三郎という言語学者ですけれども、彼は植民地政策に加担するつもりじゃなくて、純然たる学問的な仮説を唱えたんだという人もいます。たしかに、これは難しい問題です。ですが、いくら自分がそういう意図なしにやった

としても、その結果としてどういう結果が出ているか、あるいはどういう歴史的な文脈に置かれているかということ、研究者はある程度自覚すべきだと思います。

アイヌに対しては、排除することによって日本のアイデンティティーを作り出す。それに対して、沖繩と朝鮮の場合は、同化することによって日本に取り込んでいく。そういう幾つかのタイプがあると思います。

大嶺 流人、賤人というふうには、かなり子供でも差別がすごかったというんですけれども、本というのは、すぐ普及するものなんでしょうか。

イ 私が思うには、本に書かれているから普及するわけではなくて、その本というのも、当時の社会に広がっていたディスクールの氷山の一角だとらえた方がいいような気がします。売れる本というのは、実はみんなが何となく思っていることはつきり言ってくれるから売れるという面もあるのではないのでしょうか。このようなディスクール(言説)というのは、何となく社会に普及していく。そういう見方が力を持つと思います。口から口へ伝えられる風聞みたいなものでもいいです。

いま拉致の問題だつてそうですね。テレビのニュースで使われたちよつとした言葉が、みんなのものの見方を知らず知らずのうちに縛っていく。そのとき親がふとらした言葉をこどもが受けとめて、ふくらませていくこともあるでしょう。だから賤人、流人に対する差別というのは、社会の中のどこかで発生

して、再生産されていくディスクールにもとづいていたんじゃないかと思います。

四方田 ほかに何か質問はありますか。どなたかいらっしゃいませんか。どうぞ。

質問者A 明治学院大学院で、日本映画と日本映画のナショナルリズムの形成について勉強している者です。今回の話は、いわゆる他者と内地雑居という横の関係だったんですけれども、これを考えるときにもう一つ考えなければいけないのは、階級の問題だと思えます。例えば、他者として排除するというのでは、職業差別というような形でもそういうものがかなり見られるわけです。

そういう場合に、やはり汚いとか、ケガレがあるというような表象のされ方はすごくあると思うんですけれども、階級とか職業の縦の構造を言葉とか、そういう上から押しつけられるような制度の中で、どういうふうと考えていくことができるのか。何かそういうものが十九世紀後半の時期に見られるのか、ということをお聞きしたいです。

イ そもそも言葉というのは、どの社会でも階級によって違つてきます。とくに近代以前の社会では、言葉がどの階級に属するかを示す印のようになっていました。福沢諭吉の『旧藩情』という本を見ますと、言葉を聞くと、この人はどの身分に属しているか、すぐわかると書いてあります。地方の言葉についても同じで、森鷗外の『青年』を読んでもみると、田舎から出

てきた青年が、東京弁を一生懸命外国語みたいに覚えて、初めてうまく言えたときの喜びが描かれているところがあります。これは、皆さんが英語、あるいはほかの外国語を覚えて通じたときの喜びと似たものでしょう。

だから、そういうふうな縦の階級的な言葉の差、それから横の方言の差をなくして、全部同じ色で一色に塗りつぶすというのが、近代国民国家の建前なんです。さらに、話し言葉と書き言葉の距離を縮めていくこともあります。明治時代の言文一致というスローガンはそれを目指したわけです。その点から言えば、近代国民国家では、言葉のなかのさまざまな違いを消していくという方向が生まれます。

けれども、重要なのは、現実の言葉から違いがなくなることではなくて、たとえば皆さんが頭の中で何となく「日本語」のことを思い浮かべたときに、固定したイメージが浮かぶことが大事なんです。階級の言葉にしろ、方言にしろ、あるいは話し言葉と書き言葉にしろ、それらがすべて同じになることは、実際にはありえません。ところが、「日本人は日本語を話す」と言われるときには、一つの「日本語」がどこかに存在するはずだという前提があるのではないのでしょうか。

けれども、そういう「日本人」、そういう「日本語」は、いったい何なのでしょう。「我々は日本人である」と皆さんが思うときに、何をもちて日本人であると言っているのかということですね。単に日本政府のパスポートを持っているからという

理由だけではないと思います。一口に「日本人」といってもいろんな人がいますよね。納豆が好きなのもあれば嫌いな人もいます。すべての日本人に共通する性質というのは、ほんとうにあるのでしょうか。それから外国から日本を見ると、芸者とか富士山とかのイメージがすぐに出てくるかもしれませんが、こういうイメージ操作は外国だけではなくて、日本の中でも歴史的に行われてきたことです。何となく思い浮かべる「日本人」のイメージですね。これは、ベネディクト・アンダーソンが言ういわゆる「想像の共同体」というものだと思いますが、そこで言葉が果たした役割は非常に大きいと思うんです。

頭にふつと浮かんでくる「日本人」「日本語」というふうな……日本語といつても皆さんよく考えてみてください。日本語の中でも、友達に語りかけるときと、会社の偉い人に話すときでは、言葉がまったく違いますよね。皆さんが会社訪問をしたときに、面接官に「おれさあ……何々してさあ」などは言わないはず。地方出身の方だったら、小学校の友達と休み時間に話す言葉と「国語」の授業で使う言葉は全然違うかもしれません。それを全部一つの日本語というふうには、違いを塗りつぶしたイメージができてきます。このような「日本語」のイメージ、というよりも「国語」のイメージが作られたのが、明治時代だったわけですね。

「国語」というイメージには、一つの「国民」が統一的に話す言葉という意味があります。現実には、サトウさんの言葉とス

ズキさんの言葉は違うかもしれません。一人ひとり言葉の癖が違うので。しかし「国語」として思い浮かべられたときには、そのような違いがあつてはならない。誰が話しているのかわからないけれども、ともかくそういう言葉が存在すると思わなければなりません。つまり、「国語」として思い浮かべられたときには、匿名の人の言葉になっています。匿名の日本語をつくり、無色透明の言葉、においも香りもない言葉をつくることによつて、日本全体で一つの想像の共同体をつくつてきた。

そして、一つここで気をつけなければいけないのは、想像の共同体というのは、現実には根ざさない単なるフィクションかというところ、そうではありません。実際にそういうイメージに合わせて、現実を作り変えてきましたから。それから、想像の共同体といつても、何もないところから突然出てきたわけではありません。近代以前でも、日本列島に人は住んでいたし、言葉だつてしゃべっていた。しかし、それをひとくくりに「日本人」「日本語」としてとらえたときに、別の見方がまぎれこんでしまふんです。

言文一致というのも、話すように書いたら、こんなに便利なお話ではありません。ですから、明治以前にもそういう人がいないわけではなかった。勝海舟のお父さんが書いた本などは、ほとんど言文一致に近いです。そういう人ももちろんいましたがいわゆる「国民」という匿名の人間集団が、「国語」という想像上の言葉をどんなところでも使うと想像されてきているのが、

近代であるということになると思います。そうすることによつて、日本というイメージが現実に存在するかのよう受け取られてきます。

そしてあと一つだけ。たとえば、書き言葉と話し言葉の差をなくすことには、現実政策的な方針ももちろんあります。学校の授業で先生が教えている言葉でいいますと、十九世紀の終わりごろは、地方の先生たちは方言しかしゃべれなかったもので、教科書の言葉と全然違うんですね。だから文部省は、まず学校の先生たちの言葉遣いを直して、標準語で話させようとした。このような例は他の国でも見られます。

しかし、こういう現実的な政策だけが問題なのではありません。統一的な「日本語」というイメージをふと思ひ出すときには、話し言葉だけでは非常にむずかしい。書かれたものが何となく話し言葉と一体になったときに、日本語のイメージが結びやすくなります。こうして、書かれたものを通じて、具体的な言葉ではない、抽象的な日本語というものを想像しやすくなります。そうすれば、その話し手である国民、つまり「日本人」というイメージがすぐに浮かび上がる。

恐らく十九世紀の初めごろに、東北地方や九州に住んでいて、一度も東京に来たことのないおばあちゃんに、「日本語」「日本人」と言つても、あまりピンと来なかつたはずですよ。しかし今は、日本ではどこにも日本人がいて日本語をしゃべっていると思つていいと思います。実際にその土地に行ったことがなくて

もですね。そういう想像力が、あらかじめ出来ているはずです。だから近代になっては、階層の差、それから方言の差というものをなくしていくというプロセスが、「国語」をつくっていくプロセスになると思います。けれども、ご質問へのお答えになるかどうかわかりませんが、そういう「国語」のモデルが出来あがると、そこからはずれた言葉はたえず排除されていくという方向が生まれます。階級や方言に対する差別というのは、そこから出てくるのではないのでしょうか。

質問者B 一橋大学言語社会研究科で、台湾を中心に植民地文学を研究している者ですが、イ先生の授業をなかなか受ける機会がありませんので今日来ました。先生が最後のほうにレジュメで、西洋の劣等感とアジアへの偏見というふうに書いていらつしやるんですが、アジアといっても、戦前の言葉でいえば中国・朝鮮というアジアと、それ以外の例えばイスラム圏のパキスタンとかインドとか、そういったところのアジアと二つに分けて考えられるかと思えます。山室信一という人の『思想課題としてのアジア』という本がありまして、それを読んで私がちよつと驚いたのは、戦前日本人がパキスタンとかインドネシアとか、イスラム圏から来た留学生に対しては全然偏見がなく、かえって非常にあこがれを持っていたと。

普通に考えたら、中国・朝鮮の人というのは、外見的には日本人と変わらないわけですね。同文同種で全然変わらないのに反対に激しい差別があつて、インドネシアとかパキスタンか

ら来た人というと、恐らく肌の色が違うし、宗教的にもかなり違うので反対に差別感が生まれるんじゃないかと思つたら、全然ない。ですから中国・朝鮮に対する同文同種の人たちに対する差別というのは、かなり特殊な形で形成されてきたんじゃないかと思うんですが、その辺のところを……。

I どうもありがとうございます。やはりそうですね。「アジア」と括弧つきで書きましたけれども、私は戦前のタイの留学生の資料を読んだことがあります。タイの留学生が国際学友会というところで日本語を習いに、一九三〇年代から四〇年代初めにかけて、たくさん来るんです。やはり偏見は朝鮮や中国より少なかったようです。

少ないんですけども、一つちよつと考えなくてはいけないのは、他者へのあこがれというのは距離の遠さから生まれる面があります。この距離というのは、地理的なものだけではなく、心理的、社会的なものもあります。いま「同文同種」という言葉を使われましたけれども、この言葉もよく考えなければなりません。「一衣帯水」とか「同文同種」という言葉は、日本が中国を侵略するときにしきりに使っていた言葉です。韓国併合のとき日鮮同祖論が利用されたことは、先ほど述べたとおりです。差別はけつして遠くの縁のない人には向けられません。異質なものを中にとりこもうとしたときに、そこから差別や排除が生まれるように思います。